

義務教育 9 年間を「旅」に見立て

—安平町立早来学園—

い うち せい
井内 聖

安平町教育委員会 教育長

1 はじめに

北海道安平町は新千歳空港から車で20分程度の場所に位置する人口約7,200人の町である。軽種馬産業が盛んで JRA(日本中央競馬会)で開催される重賞レースの多くは安平町生産馬が獲得している。このように紹介すると財政豊かな印象を持たれがちだが、実際には他の過疎地域と同様に高齢化と人口減少が進む地方の町である。

2017年に策定された安平町第2次総合計画では、子育て・教育が計画の最初に位置づけられた。一般的に自治体の総合計画の章立ては産業や経済から始まる。地域の経済基盤づくりがまちづくりの基本だからだ。しかし、安平町総合計画の章立ては、子育て・教育を冒頭に持ってきた。高齢化と人口減少が進む町を子育てと教育を強みとしてつくってこうと方向性を決め、取り組み始めた翌年、大きな地震が安平町を襲った。

2 平成30年北海道胆振東部地震

2018年9月6日、最大震度7、北海道胆振東部地震。北海道全域がブラックアウトし、子どもたちが遊んでいたサッカー場はドクターヘリの発着場となり、小学校のグラウンドは自衛隊の野営テントが張られる光景となった。地元の早来中学校は校舎が大きな被害を受けて使えなくなった。中学校再建にあたり、町が打ち出した方針は老朽化が進む小学校を含めて小中一体校舎を新設することだった。

通常の学校づくりは6年かかる。学校配置計画の策定(1年)、基本計画(1年)、基本設計(1年)、実施設計(1年)、建設(2年)。しかし、今は学校がなく、生徒たちは公民館の会議室を仮校舎として3ヵ月過ごし、その後は体育館もグラウンドも



写真1 北海道胆振東部地震による被災状況 安平町震度6.5強

ない仮設校舎で過ごしている。一日も早い再建を目指し配置計画から基本設計までを1年でまとめることにした。現在の技術だと新校舎は50年は使うことができる。どうせつくるなら50年使えるもの、次の時代を見据えたものをつくりたい。そこで学校づくりを住民と一緒に考えることにした。

委員も代表も決めず、「今と未来の子どもたちのために新しい学校をつくりたい」という趣旨に賛同すれば誰でも参加できる会をつくり、結論よりもプロセスを大切にする議論の場をつくった。その結果、実に多様な人が集まった。校区の保護者や教師はもちろん、校区外の保護者や住民、少年団のコーチ、町外の学校教員、町議会議員、災害ボランティアで来町していたボランティア、取材に来ていた記者の方にも議論に参加してもらった。何よりうれしかったのは小学生や中学生、高校生が参加してくれたことだった。

そんな多様なメンバーで議論したことは、どんな学校をつくるか以前の問題、「学校とは何か」というものだった。学校とはそもそも何なのか。この議論も材料なしに話しあっては互いの経験と価値観のみで議論が噛み合わなくなる。そのため、



図1 学校にあったらいい機能
(住民意見)

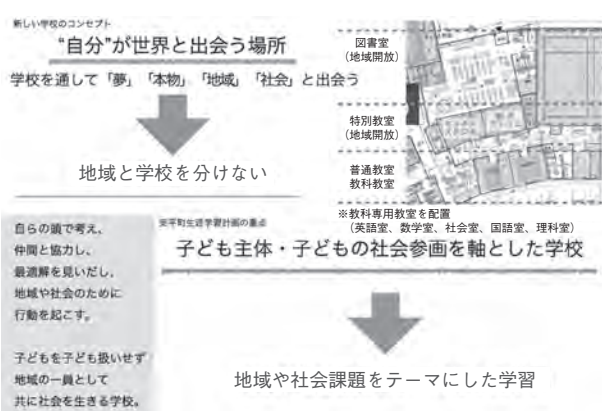


図2 学校のコンセプト

い、学校と社会を分けない、ともに学び、ともに暮らす「みんなの学校」。地域の声、現場の声、子どもたちの声を拾い、すべてを叶えていったらこうなった。地震により複数の公共

今の学校の現状、時代の変化、学びの変化などについて学習しながら議論を進めていった。Society5.0を国が進めていること、コンピテンシーの獲得が求められていること、授業のあり方が変わってきていることなどを参加者に伝え、学校の存在意義について議論していったのである。そうして生まれたのが次のコンセプトである。

自分が“世界”と出会う場所～みんなの学校～

3 「自分*が“世界”と出会う場所」

「安平町の自然や地域、文化や人に触れ、支ええられる中で、学校を通してスポーツ、テクノロジーや異年齢、多世代の人達、たくさんの本物と出会い、さらに色々な考え、多様な価値観、多くの学び、夢とも出会い、世界に生き、世界へと羽ばたいていく」

ここで指す自分とは児童生徒だけではない。また“世界”も海外ではない。農家には農業の世界があり、軽種馬には馬の世界がある。未だ出会っていない知識、新しい領域や専門の領域のことを世界と表現した。児童生徒だけではなく学校を通じて係わるすべての人が未だ出会っていない分野や領域と出会い、その出会いを通して自己を見つめ人生をよりよく生き、より豊かに暮らしてほしい。そんな願いが込められている。

地域と学校を分けない、子どもと大人を分けな

施設が被害を受けた当町において、みんなが使える学校がデザインされたのは公共施設の複合化や保全を見据えたマネジメントの必然的帰結でもあった。

4 義務教育9年間の「旅」

「昼も夜も使える空間」「カフェ×図書室」「のびのびとした教室」。みんなの学校にはどんな機能があったらいいか。住民、保護者、子どもたちからのアイデアは実に様々だった。

言葉で表すのは容易いがそれを施設として形にするのは難しい。しかし、この思いを形にしてくれる設計チームをつくることができた。そのチームが出した形は地域をまるごと取り入れた学校であった。学校の正面は公民館図書室機能を有する学校図書室。地域に開放し、フリー Wi-Fi スポット、地域交流スペース(飲食可)もある。図書室からは全面ガラス張りでキッチンスタジオ(家庭科室)と創作アトリエ(美術室)が見える。学校の中心が本、食、アートで構成され、音楽室やアリーナ、会議室がそれを囲み、さらにその特別教室はすべて地域住民も自由に使える。キッチンとアトリエの奥には幅5m以上あるプロムナード(廊下)と教室(ラーニングポッド)。地域側にある図書室からアトリエを通して教室まですべてガラス越しに見える。見えるけど分かれている。教室は一般教室の約2倍の広さがあり黒板がないため正面がない。



図3 早来学園平面図(施設利用)

学校専用区域と呼ばれる教室は子どもの成長発達に合わせて景色を変える。こども園から上がってきた小学1年生、2年生は遊具の近くに配置し教室からすぐに外へ遊べるウッドデッキがある。1年生は教室内に小上がりがあり、ロッカーは可動式でコーナー分けのパーティションにもなる。3年生と4年生は、いたずらや冒険が大好きなギャングエイジと呼ばれる年代。南側の2階に配置し、自分たちだけの空間をつくった。

5年生と6年生は学校の中心に配置。9年制の義務教育学校では中心の学年。地域とつながっているガラス張り空間に置き、全体を把握する学年とした。7年生(中学1年生)からは教科教室(国語室、社会科室など)として設定。自分の教室はなく、ホームベースと呼ばれるロッカールームに荷物を置き、学習用具のみを持って理数室や外国語室へ向かう。ただし、7年生は6年生の隣に配置することで学年の連続性を持たせている。そして8年生(中学2年生)と9年生(中学3年生)は北側の2階。採光はやや暗めだが落ち着いた空間は学習に向かうのに最適である。

配置だけではなく色にもこだわった。校舎全体を通して1階の壁は安平町の大地の色。芝生の緑や菜の花畑の黄色など。2階の壁は安平町の空の色。空の青や夕焼けの赤など。これらの色は安平町の四季を写真で撮り、そこから抽出したオリジナルカラーである。校舎の中にいるが、安平町の



図4 施設予約のIT活用

自然を目にして育ってほしいという思いが込められている。

義務教育の9年間は長い。従来の学校施設は小学1年生から中学3年生まで同じ規格の教室、場所が変わっても景色は同じ。それでは子どもに個性よりも同質性・同一規格を求めるというメッセージを送っているようなものである。

新しい学校は、義務教育9年間に旅に見立て、それぞれの学年で世界と出会う仕掛けをつくったのだ。

5 地域開放とセキュリティ

「みんなの学校」「みんなが使える学校」聞こえはよいが、実現するには様々な議論があった。特にセキュリティが一番の課題。地域の人に来てほしいが不審者対策は必要。でもセキュリティが強すぎると行きにくいし交流も生まれない。そもそも北海道の学校は上履きがあるので地域の方が学校に来るには上履きを持って「学校行くぞ」とならなければいけない。それは目指している姿とは違う。

そこで、まず外履きのまま学校に入れるようにした。児童生徒は上履き、地域は外履き。上履き外履き混合の空間をつくった。さらに学校へ入りやすいように児童生徒玄関とは別に地域玄関をつくり、そこはインターホンなどもなく公民館のようにノーセキュリティで入れるようにしたのだ。

ただ、そのまま学校専用区域まで入られると安

セキュリティはデジタル活用（顔認証）



施設管理（民間委託）と学校教育（教員）の分離

※教員の施設開放関連業務なし

図 5 施設管理の IT 活用

全が確保できないのでエリア境界に顔認証を取り付けた。児童生徒は顔パス、地域の方は顔でブロックという仕組みである。

施設利用もデジタルを活用した。従来の学校だと施設を貸し出す際は、教育委員会や学校に連絡を取り、予定の確認や学校長の承認などのフローが発生した。そこをすべてデジタル化し、専用サイトをつくり、学校が使わない時間帯は施設を開放(予約可能)にして、利用者はサイトから予約。利用時刻になれば鍵がオートで解錠し、利用が終了するとオートで施錠される仕組みにした。これによって学校の負担はなくなり、管理コストが大幅に低減した。こうなるともはや学校ではあるが施設管理は教員の業務ではなくなる。施設管理を民間に委託し、学校の施設(民間委託)と運営(教員)を分離したのである。

6 教育の対象としての場(トポス)

令和 5 年 4 月、義務教育学校「安平町立早来学園」は開校した。

平日の日中、当たり前のように図書室には地域の大人がいる。おしゃべりをしている人、テレワークをしている人、打ち合わせをしている人。体育館では高齢者向けの健康教室をやっている。ちょうど休み時間になり高齢者と子どもたちが話をしている。この日は子育て支援センターのクッキー作りがあったので 0 歳の子どもを連れた親子も来ていた。高齢者の方が 0 歳児に微笑みかけて



写真 2 早来学園図書室(常時開放)

いる。その横で小学生が本を借りに来ている。まるで学校がまちになったみたいだ。

「創造性が大切」といわれていたのはいつだろう。AI が登場し、曲も絵も動画すらプロンプトを入れればクリエイトされる時代に「人にしかできないことは何か?」「これからの時代に必要な資質能力とは」と、学校や子どもに求められるものはますます高くなってきている。一方、不登校や教員不足など、子どもも教師も学校から離れていっている。学校とは何なのか? 教育とは何なのか? そんな問いに対しての一つの解が早来学園のような気がする。

それは、建築的な視点において、建物の中心に窓と廊下のない家庭科室や美術室を配置する空間配置や体験設計(UX)を意識した動線や家具設計、ガラス張りの教室、カレースキームなどの空間デザイン、顔認証や予約システムといった IT 活用など、従来の学校とは異なる校舎であり、その設計の目的は 9 年間の旅において必然と偶発の出会いと変化を埋め込む場の設計でもある。

第 3 期安平町生涯学習計画には、教育の定義を「公教育に価値観を埋め込むこと」と示され、教育の対象には個人のみならず「場」も含まれると明記された。多世代の人が集い、居ることが認められ、学ぶことが受け入れられる「場」。学校をつくるということは「場」をつくることでもある。子どもが育つ「場」をつくれれば、そこに学びが生まれ、そこが居場所になる。価値観が埋め込まれた「場」＝学校が子どもを育て、子どもが育つのだと思う。